

# パラリンピックの原点を探って —主に戦争とパラリンピックとの関連について—

小倉和夫

(日本財団パラリンピックサポートセンター)

## はじめに

パラリンピックの原点は、通常、英国ストック・マンデヴィル病院の障がい者スポーツ大会と、そうしたスポーツの催しあるいは活動を身体障がい者のリハビリの柱の一つに位置付けたルートヴィヒ・グットマン博士 (Dr. Guttman, Ludwig) の理念にあると見られている。

その理念の形成と発展の過程は、これまで主としてリハビリにおけるスポーツの役割といった「医学的」観点の変化、あるいは、スポーツを通じての障がい者の社会復帰といった社会意識の変遷といった観点から論じられてきた。

しかしながら、パラリンピックの原点が戦争と密接に結びついており、また戦争は、終始パラリンピック大会に影を落としてきたことについては、表立って論議されることは稀である。

本論においては、そうした点について、パラリンピックの原点を探るという点と相まって、歴史的考察を簡略に行ったものである。

## A. グットマン博士と戦争

### (1) ユダヤ人迫害

グットマン博士とパラリンピックとの結びつきの原点は、ある意味では、ナチスドイツのユダヤ人迫害に端を発したとも言える。

1938年、ドイツにおいて、ユダヤ人の医者はユダヤ人だけしか患者として診療できないこととなった<sup>1)</sup>。その結果もあって、ユダヤ系出身のグットマンはユダヤ系病院の責任者となり、多くのユダヤ人の過酷な運命を目の当たりにした。

1938年11月、パリで発生したユダヤ人によるドイツ外交官殺害事件をきっかけに、ユダヤ人に対する迫害が激化したことをうけて、英国の学術関係団体からひそかに受け入

れを打診されていたグットマンは<sup>2)</sup>、1939年、ドイツを離れ、英国へ移住した。こうしたユダヤ人としての苦難の体験は、グットマンの心の中に、苦難の人生を送る身体障がい者のリハビリへの強い情熱を結晶させたことは疑いない。

同時に無視できない点は、グットマンが、ドイツにおいてはユダヤ人として扱われ、また英国では、英語も流暢とは言えない「外国人」であったことである。彼は、いわば、常にある意味で社会のアウトサイダーであり、それが、別の意味で社会のアウトサイダーたる障がい者の社会参加を促進する意欲を、一層彼の心中にかきたてたとしても不思議ではない。グットマンの、常識を覆すやり方と勇気の源泉は、彼が「何物も失うものはない」<sup>3)</sup>アウトサイダーだったからとも言えるのである。

## (2) ノルマンディー作戦

ストーク・マンデヴィル病院に、脊髄損傷者のための特別ユニットが正式に開設されたのは1944年2月のことであったが、その背景には、第二次大戦の戦況が大きく影響していた。連合軍は、その前後から、ノルマンディー上陸作戦を考慮していたが、この作戦には多くの負傷者が出ることが予想された（事実、ノルマンディー作戦には、米英軍を中心に17万人以上の兵力が投入された）。特別ユニットの設置は、そうした予想と結び付いていた。グットマンは、英国への移住後、長年にわたり治療・臨床業務、とりわけ戦争の負傷者への治療に従事したいとの希望を持っていたが、英国側の意向もあって、もっぱら大学での研究業務に従事していた。それだけに、急いで設置されることになった新しいポストに任命されるチャンスをかえって受けやすい状況にいた。グットマンの伝記作者は、これを「天運」と呼んでいるほどである<sup>4)</sup>。いずれにしても、ストーク・マンデヴィルとグットマンとノルマンディー上陸作戦とは、密接に関連していたのだ<sup>5)</sup>。

## (3) チャタレイ夫人の恋人

1928年に発表された、D. H. ローレンスの著作『チャタレイ夫人の恋人』は、第一次世界大戦中に負傷し、下半身不随となって不遇の人生を送る貴族クリフォード・チャタレイの妻コンスタンス・チャタレイ夫人の不倫を描いた小説として有名であるが、この小説が暗示しているように、第一次大戦の戦傷者の処遇は、大きな社会問題であった。とりわけ、当時治療に困難のあった脊髄損傷者は、多くは病院に釘付けになり、精神的にも悲惨な状態にあった。そして、グットマンはそうした状況をドイツでしばしば見聞きしていた<sup>6)</sup>。グットマン自身の言葉を借りれば、「なんとか生き残った人々も、家庭や施設で他人の介護を受けながら、年金生活者として生きるだけで、通常の社会生活に

復帰するような刺激や鼓舞を受けるようなことはまずなかった」のであった<sup>7)</sup>。

言い換えれば、ストーク・マンデヴィルにおけるグットマンの情熱と使命感を支えたものの一つは、第一次大戦の「傷痕」であったと言える。

因みに、チャタレイ夫人の夫クリフォードは、広大な邸宅の庭を電動車いすで動き回って気晴らしとしていたが、戦争で危うく命を失うところだっただけに、彼にとって「残っているものが、限りなく貴重だった」<sup>8)</sup>とされている。この言葉は、奇しくもグットマンが言ったとされる有名な言葉「失われたものを数えるのではなく、残されたものを生かせ」<sup>9)</sup>と相通じている。また、ローレンスは、ドイツ女性と結婚したため、夫婦は第一次大戦中スパイ容疑をかけられ、家宅捜査を受け、コーンウォールの自宅から退去させられたが、ここでも戦争が影を落としている。

## B. ストーク・マンデヴィル国際大会と戦争

このように、パラリンピックは、その原点、すなわちグットマン博士の経歴やストーク・マンデヴィル病院の歴史という観点から見ると、戦争と密接に絡んでいた。

しかし、戦争はパラリンピック大会そのものとも関連している。1948年、ストーク・マンデヴィルで開催された第1回身障者スポーツ大会へ参加した「選手」16名（男子14名、女子2名）は、全てかつて戦争に参加した兵士（ex-servicemen, women）であった<sup>10)</sup>。

また、1948年以降、1950年代前半において、ストーク・マンデヴィルの大会を財政的に支えたのは旧軍人の人々であり、また、世界退役軍人会（the World Veterans Federation）であった<sup>11)</sup>。さらに、1956年の大会においては、英国王立空軍協会（Royal Air Force Association）から、大会の施設建設のために4500ポンドが寄付された経緯もあった<sup>12)</sup>。

世界退役軍人会は、1960年のパラリンピックローマ大会開催においても大きな役割を演じた。世界退役軍人会は、1959年、総会をローマで開催したが、その際グットマンはイタリアの脊髄センターの所長や退役軍人会の幹部と協議して、オリンピックのローマ開催に合わせてストーク・マンデヴィル大会をローマで開催することに合意したのである<sup>13)</sup>。

## C. 1964年東京大会における戦争の影

1964年の東京パラリンピック大会（正確には、第13回ストック・マンデヴィル大会）においても、戦争の影が見え隠れしていた。参加した外国人選手で、パラリンピック期間中に行われたアンケート調査に回答した193名のうち、27名（すなわち約14%）は、戦争により傷害を受けた人々であった<sup>14)</sup>。

韓国の例をとると、東京大会が一つの刺激となって、1965年ストック・マンデヴィル国際大会に初めて参加したが、3名の選手（パワーリフティングと卓球）は、全員傷痍軍人であった<sup>15)</sup>。

日本からの参加者にも、箱根の国立療養所で療養中の、第二次大戦での傷痍軍人が数名含まれていた<sup>16)</sup>。これは、昭和39年6月30日付の厚生省社会更生課長から地方自治体の民生関係者に発出された「国際身体障がい者スポーツ大会実施要領について」という通達（社更107号）において、「選手の推薦に際しては、戦傷者、労災補償受給者等に係る団体等にも広く働きかけること」と謳われていることの反映でもあった。また、大会の組織委員会（正式名称は、国際身体障がい者スポーツ大会運営委員会）の理事には世界歴戦者連盟日本理事、有末清三、日本傷痍軍人会会長豊島房太郎が含まれていた。とりわけ注目されるのは、元海軍大佐で傷痍軍人会専務理事であった沖野亦男が、グットマンとパリで面談するなど、幅広い活動を通じ、東京パラリンピックの実現と運営、そして身体障がい者スポーツ協会の設立に尽力したことである<sup>17)</sup>。さらに象徴的な事柄として、選手宣誓を行い水泳と車いすフェンシングで銀メダルを獲得した青野繁夫は、日中戦争で負傷した傷痍軍人であった<sup>18)</sup>。

また、東京大会には、連日、皇族が列席あるいは観戦に来られ、その数は、（同一人物の列席も度数として計上すれば）のべ27回に及んだが、これも、第二次大戦の負傷者への配慮と平和日本再建への暗黙の表現だったと解しえよう。

## D. 近年の大会における戦争の影

2009年のことであるが、ある英国のタレントが公演会で、イラクやアフガニスタンで負傷した英国兵士のことに触れ、彼らはパラリンピックの優秀選手になれるだろうと冗談めいたコメントをしたことから、本人の謝罪問題を含め社会問題となった<sup>19)</sup>。しかし、このことは、戦争とパラリンピックが密接に結びついていることをあらためて想起させる契機となった。

また、英国の傷痍軍人（退役および現役双方）で2012年のロンドンパラリンピックに出場した選手は7名であり、そのうち2名はアフガン戦争、2名はイラク戦争での負傷者であった<sup>20)</sup>。英国選手団は272名であったから、率としては約2.5%となる。尚、英国軍関係者によれば、2001年10月から2012年3月までの期間で、アフガン戦争に従軍し手足の部分的あるいは全面的切断を余儀なくされた兵士は262名に上るとされ、それとの比較でもパラリンピック選手数はそうした負傷者の約2.5%となる<sup>21)</sup>。

また英国軍は、負傷者のスポーツ活動を支援する特別なプログラムを持っており、このプログラムの一環としてパラリンピック選手発掘週間（Paralympic Talent ID Days）を開催したところ、88名の軍人が集まり、そのうち50名は、パラリンピック選手になり得る才能があると認められたという<sup>22)</sup>。

他方、米国については、ロンドン大会でのアメリカ選手団227名（IPC統計では223名）のうち、軍人は、現役6名、退役軍人20名で約10%を占めていたとみられる<sup>23)</sup>。また、ソチパラリンピック大会では、米国選手80人（IPC統計では71人）のうち約25%は軍人または退役軍人であったといわれている<sup>24)</sup>。

注目すべきは、こうした統計の背後にある現象として、2000年代になってから幾つかの国において、傷痍軍人のリハビリにスポーツ活動、なかんずくパラリンピックを活用せんとする動きが盛んになってきたことであろう。代表的な例としては、豪州軍のパラリンピック関連プログラム（Australian Defense Force Paralympic Sport Program, 2010年発足）や米国のパラリンピック軍事プログラム（Paralympic Military Program, 2008年発足）が挙げられるが、軍が傷病兵のスポーツを通じたりハビリに特別のプログラムを設けている例は、カナダや英国にも見られる。こうしたプログラムについてパラリンピックとの関連でとりわけ注目される点は、これらの国のパラリンピック委員会が、一つには選手育成、また一つには障がい者スポーツへの国民の関心を高めるための一助として、国のために戦った傷痍軍人のスポーツ活動を活用しようとする意図があるとされる点であろう<sup>25)</sup>。

このような、パラリンピック大会に出場する選手と戦争との関連に加え、組織上の関連も指摘されねばならない。すなわち、各国のパラリンピック国内委員会の運営には、軍部が深く係っているケースが少なくないことである。例えば、韓国では、韓国パラリンピック国内委員会の委員長は、空軍参謀総長を経験した人物である。

## E. グットマンとスポーツ

パラリンピックの原点を探る時、戦争との関連以外にとりわけ重要な点は、グットマンがスポーツをリハビリの重要な一環に取り入れた経緯であろう。

もともとグットマンは、作業や娯楽（レクリエーション）が、リハビリに持つ効果を重視していたが<sup>26)</sup>、それはグットマンが、自立心や競争心を重視する性格であったことと関連していると考えられている<sup>27)</sup>。

しかし、ここで無視できないのは、レクリエーション活動に競争的なスポーツの概念を持ち込んだ経緯の一つは、身障者自身の態度にあったことである。ストーク・マンデヴィルの患者たちは、自発的に演劇活動などに積極的に取り組んでいたが<sup>28)</sup>、1944年のある秋の日、グットマンは、病院の庭で、幾人かの患者が杖を使ってホッケーの真似ごとをしているのを垣間見て、はたと、車いすスポーツとしてポロを導入することを考え付いたという<sup>29)</sup>。

言い換えれば、ストーク・マンデヴィルにおけるスポーツの導入は、グットマンの情熱もさることながら、患者自身のイニシアチブによるところがあったのである。こうしたことが起こり得たのは、ストーク・マンデヴィル病院が、単なる治療機関ではなく、もともと傷病兵の社会復帰を目指すためのものであり、従って、患者は治療とリハビリのため長時間そこに滞在し、かつ、可能な範囲で社会復帰が出来るようになるまでそこに滞在する仕組みとなっていたからである。

現在、日本では、障がいを受けて入院した患者は、一応日常生活が送れるようになれば退院させられ、本格的リハビリは病院外で行われることが多い。その結果、スポーツ活動を病院で行うことはまずなく、また、退院した患者が、スポーツ施設に通って本格的スポーツ活動に従事するまでには、時間的、心理的ギャップや移動の不便などの実際上の困難があり、障がい者自身の意欲をかきたてる環境が十分でないことを考えると、パラリンピックの原点をもう一度想起する必要があるように思われる。

## F. オリンピックとの連動

通常、パラリンピックがオリンピックと連動するようになった原点は、1948年のストーク・マンデヴィルのスポーツ大会がロンドン五輪とタイミングの上で重なったことによるとされている。しかし、それが、もともとそのように仕組まれていたのかについては、むしろそれは偶然であったが、その偶然を生かしてオリンピックと結びつけよう

とする動きになったとする見方が一般的である<sup>30)</sup>。

むしろ、ストーク・マンデヴィル大会への参加者が国際化し（オランダが嚆矢）、また規模も拡大するにつれて、大会をストーク・マンデヴィル病院で行うことは困難になり、それが五輪との連動を加速させたと考えるのが自然であろう<sup>31)</sup>。

他方、ここで考えねばならない点はIOCの態度である。IOCが、ストーク・マンデヴィル大会をオリンピックと連動させることに合意した背景には、この大会こそオリンピックの精神をよく体言していると思われたと言う点が働いている。その証拠に、グットマンは、1956年、オリンピック運動への貢献者に贈られるフィアンリー杯をIOCから受賞しており、このことは、パラリンピックとオリンピックとの連動の象徴であったといえよう。

オリンピックがますます拡大し、商業化し、職業化している現在、パラリンピックの原点、そして、パラリンピックとオリンピックの関係を考える事は、オリンピック精神のあり方を考えることにも繋がると言えよう。

#### 注

- 1) Goodman, Susan. 1986. *Spirit of Stoke Mandeville*. Glasgow: Collins. p.68.
- 2) Goodman. Ibid. pp. 78-79.  
グットマン博士の「亡命」の経緯については、戦時中のこともあり、ある意味では「秘密工作」のような動きと結びついてきたことも有り得るところであり、その全容は必ずしも明確ではないように思われる。グットマンと親交のあった中村裕によれば、1938年3月、「身の危険を感じたグットマン博士は、英国内のユダヤ人を支援する組織の援助を受け、妻子とともに着の身着のままに」亡命したとされているが（中村太郎『パラリンピックへの招待』岩波書店, p.137）、Goodmanの著書では、むしろ英国の学会やグットマンの南米の友人などの誘いや援助があったことが言及されており、中村の指摘は間違いではないが、背後関係についての事情はかなり複雑なものがあつたと想像される。
- 3) Goodman. Ibid, p.101.
- 4) 同上, p.91.
- 5) Scruton, Joan. 1998. *Stoke Mandeville Road to the Paralympics*. Cambridge: Peterhouse. p.11.
- 6) Goodman. Ibid, p.97.
- 7) 同上, p.98.
- 8) D. H. ロレンス、伊藤整（訳）『チャタレイ夫人の恋人』1996年、新潮社、p.7。  
この部分の原文は次の通り“what remained to him was inordinately precious to him”  
（Lawrence, D. H. *Lady Chatterley's Lover*. London: Penguin Classic. p.6).
- 9) グットマン博士の名言と言われるこの言葉の出所（もともと、いつ、どこで、どういう言葉でグットマンがそうした趣旨のことを発言したのかの公式記録）は、必ずしも明確ではない。またこの言葉は、英語では通常“It is ability, not disability that counts.”（UNESCO Courier 1974）とされているが、人によっては“It is not what you have lost, but what you have left that counts.”（Roberts, K. 1974. *Sports For the Disable*）と述べているものもあり、原点は明瞭ではない。日本語については、さらに曖昧であり、通常グットマンの言葉は、「失われたもの（あるいは機能）を数えるな、残っているものを最大限生かせ」（高橋明『障がい者とスポー

ツ』2004年, 岩波書店) とされているが, グットマンの令嬢の記憶によれば, むしろ, この言葉は, グットマンの考えを中村裕が日本語でそう表現したものと伝えられている。

- 10) Scruton. Ibid, p.66.
- 11) 同上, p.75.
- 12) Scruton. Ibid. p.78.
- 13) 同上, p.87.
- 14) 中村裕伝刊行委員会『中村裕伝』2013年, p.108。
- 15) 2016年7月16日開催の「“アダプテッド/医療/障がい者” 体育・スポーツ合同コンGRESS in 北海道」におけるジャスティン・ジェオン教授の説明による。
- 16) 中村裕伝刊行委員会, Ibid. p.99。尚, 箱根療養所の後を引き継いだ国立病院機構箱根病院によれば, 1964年大会への傷痍軍人の参加者は2名だったとされているが, 19名におよぶ箱根療養所からの大会参加者のうち, 軍人ではなくとも第2次世界大戦と「関連する」負傷者(例えば米軍の爆撃の被害者)がいなかったかどうかについては, これまでの調査では明らかではない。
- 17) 日本障がい者スポーツ協会『創立20年史』1985年, p.22。
- 18) 『毎日新聞』, 2015年3月27日。
- 19) Barford, V. 2012. “Was Jimmy Carr right about the Paralympics?” *BBC News Magazine*, July 4. <<http://www.bbc.com/news/magazine-18670966>> (2015.9.1. 閲覧)
- 20) GOV. UK. “Serving soldiers in GB Paralympics team.” <<https://www.gov.uk/government/news/serving-soldiers-in-gb-paralympics-team>> (2016.07.03. 閲覧)
- 21) Barford, Ibid.
- 22) 同上。
- 23) Goldberg, E. 2012. “Paralympics 2012: 5 Most Inspiring 2 Vets Competing In Paralympics.” *The Huffington Post*, August 31. <[http://www.huffingtonpost.com/2012/08/30/paralympics-2012-wounded-veterans\\_n\\_1844611.html](http://www.huffingtonpost.com/2012/08/30/paralympics-2012-wounded-veterans_n_1844611.html)> (2015.9.1. 閲覧)
- 24) Shpigel, B. 2014. “Paralympics, at Peace as Wars Wind Down.” *The New York Times*, March 15.
- 25) こうした点は, Brittain, I. and Green, S. “Disability sport is going back to its roots: rehabilitation of military personnel receiving sudden traumatic disabilities in the twenty-first century” (Smith, B. edit. 2014. *Paralympic and Disability Sport*) に述べられている。
- 26) Goodman. Ibid. p.113.
- 27) 同上, p.113, Scruton. Ibid. p.19.
- 28) Scruton. Ibid. p.23.
- 29) Goodman. Ibid. p.142.
- 30) Scruton. Ibid. p.66.
- 31) 同上, p.73, Brittain, I. 2012. *From Stoke Mandeville to Sochi*, IPC website など。

# War and the Paralympics

Kazuo OGOURA

(The Nippon Foundation Paralympic Support Center)

## Introduction

In Japan the origin of the Paralympic Games is generally traced back to the Stoke Mandeville Games of 1948 and to the rehabilitation activities of the patients in the Stoke Mandeville Hospital.

However, much attention has not been paid on the historical background of the Hospital and on the personal histories of those patients, which had a close relationship with the Second World War.

In the Tokyo 1964 Games a few Japanese wounded in the Second World War did participate. In the London 2012 Games, soldiers who had been engaged in the Afghan War or Iraq War occupied not a negligible share of the British and American Teams.

This article attempts to put some light on the relationship between the Paralympics and international warfare mainly for Japanese readers who, for historical reasons, are not well aware of such a relationship.

## A. Guttman and the First World War

- (1) Guttman witnessed wounded soldiers of the war in German hospitals
- (2) Treatment of paraplegic ex-soldiers was a grave social problem as implied in the novel "Lady Chatterley's Lover"

## B. Guttman and the Second World War

- (1) Persecution of the Jews and refuge to England
- (2) "Outsider" status both in Germany and England
- (3) Normandy operation and establishment of a special unit to take care of paraplegics

C. Stoke Mandeville Games and War

- (1) All participants to the first Stoke Mandeville Games were ex-military service men
- (2) In the 1950s, supporters for the Games were mainly veterans
- (3) World veterans meeting in Rome spurred the holding of the Games simultaneously with the Rome Olympic Games

D. 1964 Tokyo Paralympic Games and War

- (1) Out of 193 non-Japanese participants who responded to the enquiry, 27 were ex-service men or women
- (2) A few (at least two) Japanese participants were ex-service men of the Second World War
- (3) The athlete who made the oath at the opening ceremony was a person who had been injured in the Sino-Japanese war of the 1940s

E. Recent Trends

- (1) Seven members of the UK team in the 2012 Paralympic Games were ex-military persons
- (2) 26 members of the USA team in the 2012 London Games were military service persons or retired soldiers